

16の講義内容

「手書き文字」は、どうすれば巧く書けるようになるのか？

— そのコツとは —

現代の私たちは、書記文字を頭に浮かべるとき、均整の取れた美的な文字を書き文字としていて、凡てが画一化された文字を求めているように思えてくる。ここで求めようとする「手書き文字」とは、書道や習字の毛筆による書き文字に依存した世界とは異なる文字であることをまず、断っておく。筆記具も毛筆・硬筆・万年筆・ボールペン・フェルトペン（油性・水性）・鉛筆・シャープペンシルなど多様なものが用いられている。これを受ける紙自体も常に多種多様であるが、この書かれた文字を見たとき、どのうように反応してきたかを石川九楊さん『書とはどういう芸術か—筆触の美学』（中公新書）のなかで、

1、文字の美的工夫

2、書は文字の美術

3、書は線の美

4、書は人なり

の四点を以て具体的に表現している。その要点を抜粋説明すれば、

1の「文字の美的工夫」

「ひとつ一つの字画をどの方向にどれくらいの力で引いて、どのような大きさのどのような形に

仕上げ、字の並び、配列、配置のぐあいをどうするかに腐心している実作者の制作体験を、実にうまく言葉に変えている」〔6頁〕という。

2の「書は文字の美術」

「書は造形芸術（美術）の一ジャンルである。文字を書くことを場所として成立した独特の芸術である」〔8頁〕「絵画や書を、創る側からではなく、見る側から一方的に解こうとしている点だ。芸術を解く上で欠かすことのできない、作者の幻影イメーと表現の問題を素通りして、制作と創造の秘密に立ち入れないでいる点だ」〔10頁〕

3の「書は線の美」

「明治四十五年に、書家・諸井春畦が著した『書法三角論』に「配線はいせんの美」「線の美」のような記述がある」〔13頁〕「書は線の美」という説は、西欧の絵画理論に幻惑されたところに生じた論である。「字画」に対する通俗的呼称にすぎない「線」と、絵画の描写上の「線」とを類似のもの—同じものではない—として扱うことによって、書を絵画のような華々しい舞台に立たせたいとする願望が混合して、「線の美」論が誕生した」〔16頁〕

4の「書は人なり」：「書は人格を表す」「書は人柄を表す」

「実作者にとつては筆は体の一部、いわば体そのものである。さらに実作者の心理から言えば、うまく書けた場合、自分が書いたというよりも、何者かによって書かされたという実感がある」〔19頁〕「書は人なり」という論は、「人なり」が表現や美をもたらす源泉であるにしても、「文は人なり」「絵画は人なり」ともさまざまに言い換えられるように、書に固有の美が成立する構造や特性について、なんら語ったことにはならない」〔22頁〕

その他の書論

○詩人の大岡信「筆と字面の動きの様子に着目して、「私は以前、書というものはこういう点で、むしろ舞踏に最も近いといえるのではなからうかと考えたことがある」『書のおどろき・書のたのみ』」

○吉澤義則「明治天皇の御製に「をさなくも選びけるかな執る筆の力は我にあるべきものとある。書は決して筆端の藝でもなければ、小手先の技でも無い。全人格をさながらに打出した姿に外ならないのであるから、先づ己を深めなければ、書ばかり深くなる筈は無いものである」『書の友』昭和十五年一月號」

石川九揚さんはこのように説く

1, 書〔別名「墨跡」〕は筆跡〔別名「肉筆」〕、書字跡である

「書とは、言葉そのものであるところの、言葉の書きぶりの跡とでも言っておこう」

2, 書は肉筆である

「肉筆の「犬が駆けて行く」が活字に転換されたときには、言葉の意味や価値上の何かが失われる。だから、「犬がゆったりと駆けて行く」とか「犬がすさまじい勢いで駆けて行く」と加筆しなければ、つり合わないことがある。「ゆったり」とか「すさまじい勢いで」という言葉に収斂する何かが肉筆部分に隠れているのだ。むしろ逆に活字に転換されることによって、肉筆に付着している不純物を削ぎ落とすことになり、文学上の意味や価値を押し上げることもある」〔26頁〕

3, 書は筆触の芸術である

「肉筆の書きぶりの中に書の生命があり、書の美の秘密も眠っている。肉筆の書きぶりとは何かを、漫画を例に考えてみよう」〔30頁〕：夏目房之介『手塚治虫はどこにいる』を引用する

「筆触―実はここに書の美の源泉がある」〔35頁〕

巧く書くコツとは

「書体と文体に支えられてことばは、はじめて成り立つ」という。その場に見合ったことばを脳神経は立ち所に選択し、手指という機能をもって表出させる。だが、時には容易に選択してくれない時もある。その表出するに要する時間の懸けようも人それぞれ千差万別なものがある。それ故に個性あることばの響きが書くことで伝達され価値を持つと言つてよからう。

書き手は、読み手に謙遜の意を懐き、文章の最後に「乱筆乱文」を謝する文句を添えたりする。これは、あくまでも肉筆がなせる特異性であり、ワープロ入力した文章では用いない。むしろ、巻頭部に「遅れてすみません」式の詫び文言が多くなるのである。「巧く書くコツとは」日頃の鍛錬が物を言うのであり、日々の「衣食住」の生き方のなかに学ぶべきことが多いからだ。そこで、教戒をまとめてみた。

○物を書く人は、日頃思いついた語句をメモ書きして留めておく

コンパクトでいつでも書きやすい冊子型の紙綴りを持参することから始まる

メモした語句は、凡てが役立つと思つてはならない

○顔をみかくように筆腕を磨く

顔には個性があるから日々精進精進と昔はよくいったものだ。当に顔は時代と文化の産物でもあ

る。昨今、日本人の若者の顔がすつきり、さつぱり、あつさり顔に成ってきていることはご存知であろう。これは日々の生活での思考・嗜好が均一化されてパターン顔になっていることにも気づくであろう。書くことも同じことで、書くというより入力しているだけでは、同じそっくりさん式の文章にかなり得ないのだ。もつと、手でも書こう！ 人に見せても恥ずかしくない筆腕を身につけることだ。

○手なるもの

「手は現在であり、背中は過去、脚は未来である」という表現をご存知だろうか。左右の手をどのように使うかで人の真価問われてくる。日本人は、物を書く手指で食事の時に「箸」を使う。食文化の鍵は二本の箸にあり、箸づかいが日本に「加減」の文化思想を育んできたからだ。あなたの「箸づかい」は如何ですか……。

○人の技能

人の技能は、誕生したときから備わっていないのだ。生涯を通して獲得していくことになる。己の個性を出すには、急がず、ゆつくりと、繰り返し返していくしか道はないのだ。この速度を誤ると、「超○○」の「簡単」「楽」で「便利」なものだけで、何も身につけていないことになる。

○競り合う

スポーツ競技は、人が精神と肉体の限界に立ち向かうことで、生死を危うくする部分を取り除いて生まれた世界である。個人スポーツと集団スポーツの違いはあるものの、究極の限界点を探ることを惜しんではいけない。ものごとには、「けじめ」があるように、はじめが在れば終わりがあるからだ。マラソンで言えば、スタートとゴールを見極めよう。仕合の流れの駆け引きを忘れては成るまい。だからやらやっても、決して身につかないということだ。

○動く「からくり人形」になるな

「健全な精神は、健全な肉体に宿る」この古諺を忘れすべからず。病んだ肉体、病んだ精神とまで行かないまでも、第三者にコントロールされてどんなにできればの良いい作品を仕上げ書いても、喜びの感動は得られないからだ。何事も苦勞をしないで獲得はないことを臆に命じておきたい。

○手わたすこと

歴史や文化は、凡て大事に育み、確実に次の世代へと「引き継ぎ」をしていく。この「渡す」という継承を外してしまうと次にどんなに頑張っても回復するに四半世紀の叡智が必要となるのである。

これら七つのことがらが、大きな課題への取り組みに活用できれば、自ずと手で書くことも巧くなり、人に共感をもたれることに繋がると私は考える。たとえば「幸」の文字、上から見ても下から見ても同じ文字のかたちだが、これを手書きにすると、縦書きと横書きするのでは全く世界が変わっていることに気づくのではないか。それがコトの始まりであり、あなたの「幸運」の扉に繋がることを祈るしだいである。

《コラム》現代の手書きの作家—『地凶男』（ダ・ヴィンチブックス刊）の著者 真藤順丈（1977年 東京都生まれの30歳）さんは、第3回ダ・ヴィンチ賞大賞受賞、第15回日本ホラー小説大賞受賞『庵堂三兄弟の聖職』、第3回ポプラ社小説大賞特別賞受賞『RANK』と異なるジャンルの作品を手がけている。この原稿が凡てシャープペンシルによる手書きの原稿であることが興味を掻き立てる。